トポスによる説得的言論分析の試み

―近松におけるロゴスの意味―

柳沢浩哉

アメリカの修辞学者リチャード・ウィーバーは、トポスと呼ばれるレトリックの概念を用いて、説得的な言論を分析するための仮説を考案した。彼の仮説は非常にユニークなものであり修辞学者たちの注目を集めたが、実際の分析に使用できるほどの実用性はないものとされてきた。しかし、この仮説を近松の作品にあてはめてみると、たいへんきれいな形で結果が出てくる。近松の説得はエトスを重視する特殊なものであるが、この特殊性がウィーバーの仮説を成立させるための条件となっているのである。この結果から、ウィーバーの仮説はエトスを中心とした形で再解釈されるべきものであることが分かる。本稿は、日本的説得の特殊性が、レトリック（西洋修辞学）の理論に寄与した事例である。

1　トポスの意味とリチャード・ウィーバーの仮説

レトリックにトポスと呼ばれる概念がある。トポスはレトリックにおいて最も重要な概念の一つである。本稿は近松作品におけるトポスの分布を調査し、そこに見られる結果から、リチャード・ウィーバーの仮説を再解釈しようとするものである。本稿の構成は次のようになっている。

1　トポスの意味とリチャード・ウィーバーの仮説
2　近松におけるトポスの分布
3　分布の理由

トポスを語るためには、修辞学の基本概念であるロゴス・エトス・パトスから始めなくてはならない。ロゴス・エトス・パトスについては、筆者は以前に概略を述べているのでここでは簡単に説明するにとどめる。修辞学においてロゴス・エトス・パトスと呼ばれる概念はアリストテレスが確立したもので、現在でも、アリストテレスによって定義された意味で使用されている。アリストテレスは、弁論者がつくり出す説得方法をロゴス・エトス・パトスの三つに分ける。

ロゴス（論理）――― 論理的に証明するか、あるいは論理的に証明したと思わせることによって説得する。

エトス（性格）――― 話し手が自分の性格を描くことによって説得する。信頼できる、恰好がいいなど。

パトス（感情）――― 聞き手の感情を誘導することによって説得する。具体的には、怒り、不安、憐れみ、恥、同情などの感情を起こさせることによって説得する。

近松のせりふの中で最も特徴的に見られる説得の形式は、話し手が自分の性格を描くことによって説得するエトスである。更に、近松におけるエトスにはかなり特殊な傾向が見られるのであるが、この点については本稿の三章で考察することとして、ロゴスについての説明を続けたい。トポスはロゴスの下位概念である。(2)

アリストテレスはロゴスを、例証と、弁論に特有な推論（これをエンテュメーマと言う）の二つに下位分類する。帰納と演繹に対応する分類である。トポスはエンテュメーマを抽象化したものなので、トポスを理解するためには、まずエンテュメーマを知っておく必要がある。エンテュメーマとは蓋然的確実性しか持たない大前提から出発する推論を意味する。①を見ていただきたい。

①日本は経済大国なのだから、それにふさわしい国際貢献をするべきだ。

これはエンテュメーマによる推論である。①では「経済大国は国際貢献をするべきだ。」という大前提が省略されている。ここで注意すべきことは、「経済大国は国際貢献をすべきだ。」という大前提が、百パーセント真ではなく蓋然的な確実性しか持っていないことである。エンテュメーマに大前提を補った場合、外見的には三段論法と同じ形になるが、大前提の確実性によって三段論法と区別されるのである。また、①がそうであるように、実際に使われる場合、エンテュメーマの大前提は省略されるのが普通である。エンテュメーマにおける大前提は必ずしも自明な命題ばかりとは限らないのであるが、我々の言語感覚では大前提を省略した方が、自然に聞こえる。たとえば、①に大前提を補って「経済大国は国際貢献をすべきだ。そして、日本は経済大国なのだから、それにふさわしい貢献をするべきだ。」とした場合、論理性を強調しようとしているようなレトリカルな印象を与える言い方となる。この感覚は日本語特有のものではなく、ヨーロッパの言語においてもエンテュメーマの大前提はほとんどの場合省略されることが知られている。

弁論術の中ではおそらく最も重要な形式であるエンテュメー

マを、このような形に規定したのはアリストテレスである。そして、アリストテレス以来のエンテュメーマの研究史においては、その類型化が主なテーマとされてきた。レトリックという技術体系の中に組み込むためには、エンテュメーマを類型化し整理しておくことが必要だからである。アリストテレスはレトリックを「いつでも利用可能な説得手段を発見する能力である。」(3) と定義している。そして、エンテュメーマを類型化して整理しておけば、それが具体的な場面において有効な推論（エンテュメーマ）を発見するための一覧表となるはずである。アリストテレスはエンテュメーマをその大前提の形式に従って類型化し、その類型化したものをトポス（「場所」を意味する）と名付けた。トポスとエンテュメーマの関係は抽象と具体である。さまざまなエンテュメーマの中から似たものを集めて一組とし、それを抽象化したものが一つのトポスであり、逆にトポスを具体化あるいは顕在化させたものがエンテュメーマとなる。アリストテレスは『弁論術』の中に二八種類のトポスを用意している。しかし、彼自身のトポスには未整理な部分が多く、その後、キケロやクィンティリアヌスをはじめ多くの修辞学者が改良を加えていくことになる。そのため、エンテュメーマの類型化（トポス）にはさまざまな形が提案されているのであるが、本稿では、現在アメリカの修辞学者リチャード・ウィーバーの整理したトポスを使用したい。ウィーバーはアリストテレスの二八種類のトポスを基に八つのトポスを提案している。彼のトポスは理論的に必要十分なものであるだけでなく、実際に大学の作文教育に使われて大きな効果を挙げており、その実践的価値も証明されている。

ウィーバーは次の八つのトポスを提案している。(4)

類あるいは定義からの議論
因果関係からの議論
状況からの議論
類似からの議論
比較からの議論
反対からの議論
証言からの議論
権威からの議論

先の①「日本は経済大国なのだから、それにふさわしい国際貢献をするべきだ。」では、「経済大国」という類の性質が問題とされており、①は「類あるいは定義からの議論」のトポスにあたる。なお、以下では、八つのトポスの名前をそれぞれ、「類あるいは定義」「因果関係」「状況」「類似」「比較」「反対」「証言」「権威」と省略して書くこともある。右のトポスの中で分かりにくいと思われるトポスについて例文を挙げてみる。

類および定義　「これは権威ある雑誌に載った論文ではないから、良い研究とはいえない。」ここで省略されているは「良い研究とは権威ある雑誌に載った研究である。」という前提である。これは「良い研究」の定義から出発する議論である。類からの議論と定義からの議論は重なることが多いため一つにまとめられている。

反対　「日本製品の輸入によって国産品の売れ行きが急速に落ちている。従って、日本製品の輸入を制限すれば、わが国の経済状態は改善されるはずである。」ここでは、逆（反対）は真であるという前提が省略されている。

状況　「そうするより他に仕方がないから、こうしました。」「各界からの要請を受けて、選挙戦への出馬を決意いたしました。」

比較　「彼は英語もろくに読めないのだから、フランス語が読めるはずがない。」

権威　「原子力の専門家が原発は危険だと言っているのだから、原発は廃止していくべきだ。」

ウィーバーはこれらのトポスを二つの領域において利用することを試みた。一つは高等教育（大学）での作文教育、もう一つは説得的言論の分析である。[5] 上に示した八つのトポスは、彼が作った大学向けの作文教科書から引用したものである。トポスを作文教育に応用しようとする試みは大成功をおさめ、アメリカの高等教育を中心とした国語教育界に修辞学ブームを作りだした。アメリカの国語教育界における彼の影響力は三十年近く経った現在でも健在である。レトリックは本来、弁論家の教育を目的とした技術であるから、トポスを作文教育に応用する試みは、トポスの利用方法として伝統的なものである。しかし、もう一方の、トポスを言論の分析に応用しようとする試みはウィーバーの独創であるとともに、そこでは興味深いいくつかの指摘がなされている。本稿では、彼の後者の試みに注目しているので、この部分について以下に概説していきたい。なお、ウィーバーの二つの試みについては、香西秀信氏によって詳しく紹介されている。

ウィーバーの後者の試みを一言で言えば、議論の形式から論者の思想傾向を解明しようとするものである。彼は、言明された主義主張よりも、議論の方法の方が論者の信念をより忠実に表現していると考えるのである。彼のこの試みは「言語は説教である」という一九六三年に書かれた論文の中に展開されている。[6] この論文は当時、その独創的なアイデアが修辞学者たちの注目を集め、この論文をめぐっていくつもの論文が書かれた。もちろん、現在でも広く知られた論文であり、アメリカの修辞学の基本文献の一つとなっている。彼はこの論文の中でまず、「影響力を意図した言論の源」をつく

り出すトポスとして、右の八つよりも少ない、次の四つのトポス、すなわち「類あるいは定義」「類似」「原因－結果」「状況」の四つを選ぶ。この四つのトポスのどれを特徴的に用いるかによって、論者の思想傾向を解明しようというのである。彼は次のように述べている。「現実をどのように秩序付けてとらえているか、あるいはさまざまな価値観をどのように整理し理解しているかが、トポスの選択を決定するであろう。」(7) ここで注意すべきことは、彼は「さまざまな価値観」を並列的なものとしては扱わず、彼自身の倫理観から、それらに階級を与えていることである。彼の独特の価値観については香西氏が次のように的確にまとめている。(8)

ただしウィーバーは、この四つの型を並列的に扱っているのではない。倫理的に望ましいと思われる順に序列を付けている。そしてその際に基準となるのは、彼自身の信奉するプラトン主義－すなわち、移りゆくものよりも不変なもの、生成よりも存在をより価値ありとする考え方である。ウィーバーはこの基準をもとに、四つのトポスに階級を与え、更に、それぞれのトポスに特徴的な思想傾向を示している。四つのトポスの特徴についても香西氏が的確にまとめているので、香西氏の論文からその解説部分を引用したい。(9)

最も高い階級を与えられているのは「定義からの議論」である。この議論の型には議論の対象となるものの本質からの議論一切が含まれ、また論者の主義・原則からの議論も含まれる。この種の議論は、観念論者、また言葉の最も正しい意味での保守主義者の特徴である。

二番目は「類似からの議論」である。この型は、比喩（たとえ）を使った議論によって代表される。これが二番目に位置づけられるのは、比喩がたとえられるものの本質を暗示しているからである。詩的な、想像力豊かな持ち主がこの種の議論を好み、詩人、宗教家によって多用される。　三番目は「原因と結果」からの議論である。この型が前の二つよりも劣るのは、これが原則や定義された観念への言及を欠き、移りゆく現象の領域に関するものだからである。この型の議論によって特徴づけられるのは、急進派およびプラグマティストである。

最も下位に位置づけられるのが、「状況からの議論」である。この議論は、ものの本質や原則ではなく、その場の状況から説得しようとする議論である。ウィーバーによれば、この型は事実を知覚する段階にとどまっていて、最も哲学的でなく、理性の降伏とでもいうべきものである。現存し、触知できるものに影響されやすい人、特に自由主義者が特徴的にこの議論を好む。

これら四つのトポスのうち、ウィーバーが特に関心をもって考察しているのは、定義からの議論と状況からの議論で

ある。なぜなら、この二つの型は、議論において本質や原則を重視するかそれともそれをとりまく処々の状況や事情を重視するかという両極に位置した二つの認識の方法を特徴づけているからである。

トポスは本来、説得的な言論を作成するための体系であるが、ウィーバーはこれを逆に使って、言論の分析に使用する可能性を示したのである。ただし、右の引用の中に述べられているトポスと思想の対応関係は必ずしも帰納から得られた結果ではなく、非常に単純化されたものであるとともに、ウィーバーの個人的な価値観を色濃く反映したものとなっている。リチャード・ヨハンソンらのウィーバー理論の研究グループも、彼のこの仮説には否定的であり、次のように批判している。(10)

議論の型の特徴を、修辞的批評の主要な基準として使うために、彼は過度に単純化された評価法を描き出してしまった。その方法を使った分析は、修辞過程におけるその他のさまざまな意味のある要素を無視させてしまうのである。

実際、ウィーバーは保守主義の源流であるエドムンド・バークとリンカーン大統領の演説をこの前提を使って分析し、「状況」を多用したバークは真の保守主義者ではなく、「定義」を好んで使ったリンカーンこそが真の保守主義者であるという結論を導いているが、この結論は多くの修辞学者の集中砲火を浴びている。結局、トポスを思想の分析に利用しようとした試みは、多くの修辞学者の注目を集めたものの、実際の分析に応用できる仮説を提出するには到らなかったのである。

しかし、近松のせりふの調査から得られた結論は、ウィーバーに対する従来のこの否定的な評価を覆す可能性を秘めたものである。彼がトポスの中で二つの両極に位置するとした「定義」と「状況」が、近松において、まさに両極の分布を見せているのである。

2　近松におけるトポスの分布

本稿では近松の世話ものの中の『曽根崎心中』『冥途の飛脚』『大経師昔暦』『鑓の権三重帷』『心中天の網島』『女殺油地獄』の六作品について調査を行った。(11) 近松のせりふではエトスによる説得が圧倒的に多いが、ロゴスによる説得も少なくはない。エンテュメーマの用例については「情況からの議論」が大多数を占めている。そして、数の上では大きな開きがあるが、「定義からの議論」がそれに続く。筆者は当初、これらのトポスの登場人物による使い分けの可能性を探ってみたが、登場人物による使い分けは認めることができなかった。しかし、場面とトポスの対応を調査してみると、

この二つのトポスには規則的な使い分けを認めることができる。まず、特異な分布を見せる「定義からの議論」の例を見てみたい。

実際のせりふでは、それがエンテュメーマによるものか、更にどのトポスを使用しているのかの判断の難しいものも少なくないが、先程挙げた六作品について、明らかに「定義からの議論」のトポスを使っているものを集めると少なくとも一〇例の用例がある。次の例は、『冥途の飛脚』の封印切りの場面、梅川が忠兵衛の封印切りを止めようとするせりふである。

情なや、忠兵衛様、なぜそのやうに上らんす。そもや廓へ来る人の、たとへ丸持長者でも、銀に詰るはある習ひ。こゝの恥は恥ならず。何をあてに人の銀。封を切つて撒散らし、詮議にあうて牢櫃の。縄かゝるのといふ恥と、この恥とかへらるか。とつくと心を落しつけ、八様に侘言し。銀を束ねて、その主へ早う届けてくださんせ。

この例では梅川が、「恥」の定義を操作することによって忠兵衛の説得を試みている。一般に、梅川の口説きとされているせりふであるが、「情なや、忠兵衛さま、なぜそのやうに上らんす。」という出だしから分かるように、冷静な梅川が、逆上している忠兵衛を強い調子で落ち着かせようとしているせりふであり、単なる口説きではなく、叱責の性格が強いせりふである。この例は近松に現れる「定義」の典型的な形である。近松において「定義」は、話者が被説得者に対して対等な意識を持っている場合には決して見られない。この他には、たとえば、『大経師昔暦』の講談師梅竜が姪の玉を説教口調で叱責するせりふ、同じく『大経師昔暦』で東岸和尚が、磔を止めさせようとして警護の役人に尊大な調子で言い掛けるせりふ、『女殺油地獄』で小栗八弥が家来の森衛門をたしなめるせりふなどに見られる。（ただし、『女殺』の八弥のせりふは、テキストによっては「定義」の部分に異動があり、「定義」の見られない諸本もある。(12)）これらはいずれも、尊大な言葉か叱責の言葉であり、一〇例のうち、六例までが、尊大表現、叱責、言い合いに現れている。

次の例は『大経師昔暦』の上之巻、手代の茂兵衛が、主人の妻であるおさんの、店の金を一時用立てて欲しいという願いを承知する時のせりふの一部である。この用例は尊大とはややニュアンスを異にしている。

はれやれ、姫御前と申す者はお気が細い。五十貫目、百貫目でもあることか。仰山さうに、それほどの銀、ぐどおつしやることかいの。旦那の印判一つ、問屋へもつて参れば。江戸為替二貫目や三貫目、常住取遣いたします。物ならたつた二十日の間、お気遣ひなされますな。今日のうち一貫目、きつと調へ進じませう。私が少しのあいだ横道

いたせば事が済む。というて盗みするでもなく、人の目をかすめること。よし盗みすればとて、身の欲につかぬは天道が明らかなり。お前とてもお主、親の恥は娘の恥。舅の恥は婿の恥。二人のお主の恥をすゝぐは畢竟お主の奉公。落着いて奥へござりませ。

茂兵衛は「盗み」を「目をかすめる」と言い換えて自分の行動を正当化している。これは「盗み」の定義を操作することによる説得である。更にこの例の後半にはもう一つの「定義」がみられる。茂兵衛が「恥」を言い換えていくことによって「恥」が「奉公」であると言う部分であり、これも定義の操作による説得である。しかし、茂兵衛はまじめな手代であり、主人筋に対して尊大な表現をするとは考えにくい。ただし、ここで見落としてならないのは、茂兵衛が酒を飲んでいる事実である。このせりふの前には「茂兵衛も一杯機嫌。」とある。更に、出だしの「はれやれ、姫御前と申す者はお気が細い。」は、真面目な手代である茂兵衛らしからぬ言葉であり、茂兵衛が酒を飲んで気が大きくなっていることがわかる。このせりふも、尊大な表現に準ずるものとして理解できよう。

次の例は言い合いに現れた「定義からの議論」である。この例は「定義」の性質を端的に示している。『鑓の権三』の下之巻、助太刀を申し出る義理の弟甚平とそれを断ろうとする市之進が言い合いになる場面である。分かりやすくするため「　」を付ける。初めが甚平、次が市之進である。

「幸ひのをりに参り合ふ、本望達せん吉左右。いざ御同道つかまつらん」とぞ勇みける。市之進手を打ち、「さて〳〵御苦労、お骨折り。御親子の御懇意心肝に徹して恭し。もはやこれより御同道にはおよばず。我ら一人参るからは外を頼むこともなし。甚平殿は御休息頼み入る」と言ひければ。「いやさ、いはれぬ遠慮。心は弥猛に存じても、人数なければ手の廻らぬこともある。さてこそ、留守のうち。よもや何事もあるまじと落ち着いてもかやうの事の出来。権三も他国に親類、知音もあるべし。なんと構へ置くも知らず。三日路、四日路とも踏み出し。時の変にて助太刀欲しいこともあるべし。是非ともに御同道。」「イヤこれ御心底頼もしけれど。女房の弟に助太刀させ、妻敵討つては本望でもあるまいか。」「いやさ助太刀と極めずとも。たゞ力になるまでのこと」と、声高になりければ、市之進色を損じ。「さては茶入釜の蓋取るより外。人の首の取りやう知るまいと思召すな。」

初めは穏やかであったやり取りが次第に声高になっていく場面である。ここでは二種類のトポスが使われている。一つは「権三も他国に親類、知音もあるべし。なんと構へ置くも知らず。三日路、四日路とも踏み出し。時の変にて助太刀欲しいこともあるべし。」の部分。将来において状況が変化した

場合、助太刀が必要であろうという推論であり「状況からの議論」にあたる。もう一つが「定義からの議論」でありここでは二箇所に見られる。一つは「女房の弟に助太刀させ、妻敵討つては本望でもあるまいか。」の部分。この市之進の言葉は甚平の最初の言葉「幸ひのをりに参り合ふ、本望達せん吉左右。」を踏まえた言葉であり、「本望」の意味を操作する「定義からの議論」である。そしてもう一つは、「いやさ助太刀と極めずとも。たゞ力になるまでのこと」であり、ここでは「助太刀」を「力になる」と言い換える「定義からの議論」が使われている。ここで注目したいのは「定義からの議論」が、言い合いの口火を切っていることである。市之進の「本望」についての「定義からの議論」に対し、それまでは穏やかだった甚平が声高に「助太刀」についての「定義」で応酬し、それを聞いた市之進は「色を損じ」て露骨に怒りを表している。これは初めの方に使われている「状況からの議論」と対照的である。「定義」の現れる場面が、叱責、言い合い、尊大な表現に限られていることは既に述べた。しかし、『鑓の権三』のこの用例を見ると、「定義からの議論」に対しては、更に積極的な意味を読み取るべきであることが分かる。すなわち、「定義からの議論」は相手を卑下する侮辱的な意味を持っているのである。

次に挙げるのは、侮辱的なせりふ以外で「定義」が使われている例であるが、ここでは「定義」のこのような性質が巧みに利用されている。これは『鑓の権三』の上之巻、奉公人と竹竿を振り回して遊んでいた虎次郎を、その母親おさゐがたしなめようとする場面のやりとりである。分かりやすくするため、「　」をつける。初めがおさゐ、後が虎次郎である。

「これ、虎次郎。あの馬鹿を相手に日がな一日悪あがき。一々帳につけ、父様お帰りなされたら。きつと告げる、待つてゐや」と。叱られて、「いや母様。悪あがきはしませぬ。わしは侍ぢや、鑓遣ひ習ひます。」

この例では、虎次郎がチャンバラごっこを「鑓遣ひ」と言い換えて弁明している。一人前の分別を持った大人なら、母親に対して侮辱的な「定義からの議論」を使うことは許されなかったであろう。しかし、それが子供であれば、ある程度無礼な言動も許される。虎次郎はこの時十才である。十才という年齢に対する当時の社会的な意味を考えることは難しいが、このせりふは、虎次郎にまだ一人前の言葉遣いが身についていないことを示している。竹竿を振り回して遊んでいた事実とこのせりふとが相まって、観客には虎次郎の幼さが強く印象付けられたはずである。虎次郎にはこの後、仇討ちに行く父に助太刀を申し出て諭される場面がある。その場面において虎次郎が幼ければ、父を助けようとするけなげさは一層強まるはずである。つまり、この例における母子のやりとりは

その効果を高めるための伏線なのであり、この例においては「定義からの議論」が登場人物の性格描写に使われているのである。

次に「状況からの議論」の例をみよう。「状況からの議論」の用例はかなりの数にのぼり、近松に見られるロゴスからの説得のほとんどがこれである。そして、「状況からの議論」は「定義からの議論」とは対照的な分布を見せている。「状況からの議論」の用例のほとんどは真剣な説得において使われ、侮辱的なせりふに現れることはない。また、目上の者に対する説得においても多用されている。どちらも「定義からの議論」は決して現れることのなかったせりふである。次の例は『冥途の飛脚』上之巻、忠兵衛が、八衛門に対し、八衛門の金を使ってしまったことを白状するせりふである。

何を隠さう、この銀は十四日以前に上りしが。知つてのとほり、梅川が田舎客。銀づくめにて張合かける。此方は、母、手代の目を忍んで。わづか二百目、三百目のへつりがね。追倒されて、生きた心もせぬところに。請出す談合極つて、手を打たぬばかりといふ。川が嘆き、我らが一分、すでに心中するはずで。互の喉へ脇差のひいやりとまでしたれども。死なぬ時節か、いろ　の邪魔ついて。その夜は泣いて引別れ、明くれば当月十二日。そなたへ渡る江戸銀がふらりと上るを、何かなしに。懐に押込んで、新町まで一散に。どう飛んだやら覚えばこそ、だん　宿を頼んで。田舎客の談合破らせ、こつらへ根引の相談しめ。かの五十両手付に渡し、まんまと川を取りとめしも。八衛門といふ男を友達に持ちし故と。心のうちでは朝晩に、北に向ひて拝むぞや。（後略）

ここで忠兵衛は、八衛門の金を使う以外に梅川を引き止める手段がなかったことからの説得を試みている。「状況からの議論」である。これはかなり真剣な説得であるとともに、それまで怒りを露にしていた忠兵衛を説得することに成功している。後述するようにここでの成功はエトスによる部分が大きいのであるが、このような真剣な説得において「状況からの議論」が使われ、更に成功していることから、このトポスは相手を卑下するような意味を持っていないことが分かる。

次の例は『天の網島』の下之巻、心中の場で義理に苦しむ小春が、治兵衛に殺してくれと頼む場面である。

私が道々思ふにも、二人が死顔並べて。小春と紙屋治兵衛と心中と沙汰あらば。おさん様より頼みにて、殺してくれるな、殺すまい。挨拶切ると取交せし、その文を反古にし。さすが一座流れの勤の者。義理知らず偽り者と、世の人千人、万人より。おさん様一人のさげしみ。恨み妬みもさぞと思ひやり。未来の迷ひはこれ一つ。私を、こ、で殺して、こなさん、どこぞ所を変へ。

ここで小春は、心中後の状況を仮定し、その時におさんにさげすまれるであろうことを根拠としている。これは心中の結果を根拠とした説得であり、「因果関係からの議論」であるように見える。しかし、ここで小春が問題としている結果は、心中が直接につくり出す結果ではない。あくまでも、心中をとりまく状況、未来の状況なのである。従って、この例も「因果関係からの議論」ではなく「状況からの議論」と考えるべきである。近松の「状況からの議論」はその多くがこのような、仮定された未来の状況を根拠とする形を取っている。小春の説得も真剣であることは言うまでもない。次に目上の者に対して「状況」が使われている例を見たい。次の例は、『鑓の権三』下之巻、市之進の舅忠太兵衛のやりとりでりる。忠太兵衛は、市之進の仇である伴之丞を斬ることを申し出るが、市之進がそれを止めるくだりである。初めの「　」が忠太兵衛、後の「　」が市之進である。

「最初不義の証拠を取つて我らにも知らせ。国中に沙汰をした事触は川側伴之丞。きやつを斬つて老後の思ひ出、お放しやれ」と駆出づる。「アヽこれ、御心外もつともながら、御老人の腕先。万一伴之丞に討たれさつしやれば。この市之進まづ妻敵を差置き。舅の敵を討たねば叶はず。取交ぜ迷惑は拙者一人。ひらに御了簡。御厚意恩に受けます る」と差俯向けば。

市之進は未来の状況を仮定してそれを根拠に説得している。市之進の言葉は舅に対する礼を守ったものであり、舅もこの言葉に説得されている。この言葉においても先の用例と同様、市之進の言葉の説得力をつくり出しているのは、ロゴスによる論理的な説得ではなく、舅への忠心をアピールするエトスの部分なのであるが、このような目上の者に対する真剣な説得においてトポスが使用される場合、「状況」が選ばれることが重要である。

実用性はないとされてきたウィーバーの仮説が、近松においては見事に適応できるのである。次章では、この理由を考察するとともに、ウィーバーの仮説の一般化の可能性についても考える。

3　分布の理由

ウィーバーは各トポスの性質を、彼の倫理的な価値観と結び付けて解釈することを試みて失敗した。しかし、近松の例を見る限り、各トポスは何らかの異なる性質を持っていると考えざるをえない。ウィーバーの仮説の問題点を、その方法的な部分に求めるとすれば、彼が各トポスをトポスの枠内で処理しようとしたことが指摘できる。彼は議論の形式以外に、トポスの性質を探るための視点を持たなかったのである。彼

が倫理観という、あらゆるものを序列化しうる座標軸に向かって行ったことは、彼の方法においてはある程度予想された方向であったとも言えよう。しかし、各トポスの性質を考えるには、あらゆる研究対象がそうであるように、各トポスをメタなレベルからながめることが必要である。そして、近松におけるトポスの分布の原因は、ロゴス・エトス・パトスというメタレベルの視点を導入することによって解き明かすことができる。本稿で注目したいのは、ロゴス・エトス・パトスの相関関係である。この相関関係は、規範的な序列ではなく、説得の場における力学的な相互作用であり、たとえば、各要素間に考えられる、共存、相乗、相殺、矛盾などの関係である。

近松の作品ではエトス、すなわち、話者の好ましい人格による説得が最も重要である。近松においては、エトスによる説得が数の上で非常に多いばかりでなく、真剣な説得の多くがエトスを使っており、量と質の両面においてエトスが重視されていることが分かる。しかし、近松におけるエトスの重要性はこれだけにとどまらない。ロゴスによる説得の多くがエトスに還元されてしまうのである。前章に引用した用例をこの点から検討してみよう。次に挙げるのは、「状況からの議論」の例として挙げた『鑓の権三』の中の、市之進とその舅、忠太兵衛のやりとりである。忠太兵衛が、市之進の仇である伴之丞を斬ることを申し出るが、市之進がそれを止めるくだりである。初めの「　」が忠太兵衛、後の「　」が市之進である。

「最初不義の証拠を取つて我らにも知らせ。国中に沙汰をした事触は川側伴之丞。きやつを斬つて老後の思ひ出、お放しやれ」と駆出づる。「ア、これ、御心外もつともながら、御老人の腕先。万一伴之丞に討たれさつしやれば。この市之進まづ妻敵を差置き。舅の敵を討たねば叶はず。取交ぜ迷惑は拙者一人。ひらに御了簡。御厚意恩に受けます る」と差俯向けば。「なう、これ市之進。かほどに根性の腐つた女房の親でも。忠太兵衛が討たるれば舅の敵を討つ気よな。」「これは曲もないお尋ね。たとへ女は畜類になつたりとも。舅は舅に極つた。忠太兵衛殿。敵があらば討たいでは。そりやお尋ねにおよばぬこと。」「市之進、ア、御心底身に余り恭い」と。大地にどうと老体の、うづくまりたる感涙に。市之進も、これはと手をつかね。涙にくれし婿、舅、武家の道こそ正しけれ。

このやりとりを理解するためには、もう少し説明が必要である。市之進の妻、すなわち忠太兵衛の娘であるおさゐは、市之進の留守に権三と駆け落ちをしており、忠太兵衛は市之進にとって舅であると同時に仇の親でもある。また、忠太兵衛が斬ろうと言っている伴之丞は、権三とおさゐを陥れた張本

人である。つまり、このせりふにおいて市之進は、仇の親である忠太兵衛に対して、婿としての礼を尽くそうと言っているのである。市之進の言葉は、外見的には「状況」のトポスを使ったロゴスによる説得である。しかし、忠太兵衛をこれほど感激させたのは、その論理的な推論ではない。「状況」による説得の前提にある、舅への礼を当然のこととして守ろうとする市之進の人格である。すなわち、市之進の言葉は外見的にはロゴスを装っているが、実際にはエトスによって説得力を作り出しているのである。前節に挙げた『冥途の飛脚』の忠兵衛の例もこれと同様のメカニズムを持っている。忠兵衛が、八衛門に対し、八衛門の金を使ってしまったことを白状するせりふである。

何を隠さう。この銀は十四日以前に上りしが。知つてのとほり、梅川が田舎客。銀づくめにて張合かける。此方は、母、手代の目を忍んで。わづか二百目、三百目のへつりがね。追倒されて、生きた心もせぬところに。請出す談合極つて、手を打たぬばかりといふ。川が嘆き、我らが一分、すでに心中するはずで。互の喉へ脇差のひいやりとまでしたれども。死なぬ時節か、いろ　の邪魔ついて。その夜は泣いて引別れ、明くれば当月十二日。そなたへ渡る江戸銀がふらりと上るを、何かなしに。懐に押込んで、新町まで一散に。どう飛んだやら覚えばこそ、だん　宿を頼んで。田舎客の談合破らせ。こつちへ根引の相談しめ。かの五十両手付に渡し。まんまと川を取りとめしも。八衛門といふ男を友達に持ちし故と。心のうちでは朝晩に、北に向ひて拝むぞや。さりながら、いかにねんごろなればとて。先に断り立ておいて、使へば借るも同然。後ではいかゞと思ふうち、其方からは催促。嘘に嘘が重つて、初手のまことも虚言となれば。今何を言うても、まことには思はれじ。されども遅うて四日、五日中、外の銀も上るはず。いかやうともしおくつて、一銭一字損かけまじ。この忠兵衛を人と思へば腹も立つ。犬の命を助けたと思うて、了簡頼み入る。これを思へば、世の中にお仕置者の絶えぬも道理。この上は、忠兵衛も盗みせうより外はなし。男の口からかやうのこと言はれうものか、推量あれ。喉より剣を吐くとても、これほどにはあるまじと。絞り。泣きにぞ泣きゐたる。

八衛門はこの言葉に説得されて忠兵衛を許す。この言葉に「状況」が使われていることは先に述べたとおりであるが、この言葉においても、八衛門を説得したのはその論理性ではなくエトスである。特にこの言葉の後半には、忠兵衛が自分の苦しい気持ちを直接に語り自らの人格を強調しているが、「状況」による説得においても、そこで伝えようとしているのは、自分がいかに追い詰められていたか、そして自分がいかに真剣に悩んでいたかの告白であり、「状況」のねらいは

エトスからの説得にある。

エトスは、話し手が自分の人格を描くことによる説得であり、言うまでもなく、その人格は好ましいものでなくてはならない。具体的にどのような人格が「好ましい人格」であるかは文化によって異なり、更に同じ文化の中でも状況によってさまざまな選択可能性がある。しかし、近松における「好ましい人格」、すなわち説得力を持つ人格はかなり限定されたものであるとともに、世話物にかんする限り、どの作品においてもほぼ一定である。それは右の二つの作品にも現れている。一つは市之進の言葉に見られる、義理に生きようとする姿勢。もう一つは忠兵衛の言葉に見られる、問題を自分一人で抱え込んで真剣に悩む姿勢である。この二つを言葉を換えていえば、前者は自分の欲求を抑えること、後者は他人の助けを拒絶することであり、ともに自己の抑制という点で共通している。そして更に、自己抑制が具体的な行動となり自己犠牲という形をとった時、最も説得力の強い人格（エトス）となる。

まず、「状況」について考えてみたい。ウィーバーは「状況」の説得効果について、一章で紹介した「言語は説教である」という論文の中ではあまり具体的な言及は行っていないが、別の本において、次のような興味深い考察を披露している。(13)

「状況」は因果関係の中に含めうるものであるが、そこに深い洞察はなく、最も非哲学的なトポスと言える。救いの見出せない状況を自然の手に委ねるのであり、動かし得ない事実の存在を指摘するだけの無力さの現れである。

ウィーバーは、受け身的で消極的な説得形式であるとして「状況」に対して否定的な見方をしているが、この考察はそのまま、次のように読みかえることができるであろう。

「状況」は自己の欲求を極力抑え、状況を積極的に受け入れていこうとする意思の表現である。

これが、エトスの表現において、どのような表現効果を持つかは明らかであろう。近松において望ましい人格は、自己を抑制して状況を受け入れていこうとする態度である。「状況」は、近松における望ましいエトスを直接的に表現できる形式なのであり、近松においては、エトスによる説得の手段として「状況」が使われているのである。

次に「定義からの議論」の特徴を考えてみよう。「定義」の説得効果にかんして、ウィーバーはあまり言及していながら、彼の言葉を手掛かりに、「状況」と比較しながら「定義」の説得効果を考えてみたい。彼は、「定義」について次のような言及をしている。(14)

「類あるいは定義からの議論」の説得力は次のような原理が作りだしている。まず固定された類があり、その類につ

いて正しいことは類の全ての構成メンバーに対してあてはまる。言い換えれば、全てのものはそれが属している類の属性を持つのである。

この言葉は、先程の

救いの見出せない状況を自然の手に委ねるのであり、動かし得ない事実の存在を指摘するだけの無力さの現れである。

と対をなす言葉である。この二つの言葉の意味を考えるために、「状況」と「定義」の推論形式を次のように一般化してみる。

「定義」

大前提　Pと分類（定義）されたものはQの性質を持つ。

小前提　SはPと分類（定義）される。

結論　SはQの性質を持つ。

「状況」

大前提　Cという状況における選択肢はRである。

小前提　Tの状況はCである。

結論　Tの選択すべき方法はRである。

どちらも形式論理的には正しい形式である。しかし、実際の議論の場では、各項に話者が主観的に選択した内容が入るため、各命題は蓋然的な確実性しか持たない。ただし、ウィーバーは、「定義」と「状況」の推論形式を同等のもとは考えず、それぞれの大前提に違いのあることを指摘しているのである。まず、「定義」において大前提が問題としているのは、類とその構成要素の属性の関係であり、これは普遍性を持つ関係である。たとえば「哺乳類の体温は一定である。」のように、この形式において真となる命題を作ることは難しくない。もちろん、「定義」の大前提が真となるか否かは、Qの選択が決定するのであるが、「定義」は普遍的な関係を背景にした推論形式であることが重要である。しかし、一方の「状況」において、その大前提が真となることはない。実験のような人工的な場を除けば、状況における選択肢が必然的に決定されることはありえないからである。すなわち、「定義」が普遍的な関係を利用した推論形式であるのに対し、「状況」は普遍性とは無縁の推論形式なのであり、右に並べたウィーバーの二つの引用はこの違いを指摘しているのである。

ウィーバーは大前提にかんしてのみ「定義」と「状況」の違いを指摘したが、両者の違いは小前提においても観察することができる。もちろん、どちらの場合も小前提は話者の主観によって決定されるのであるから、小前提の確実性という点において、両者に違いを認めることはできない。しかし、「定義」においては、小前提で示される定義が、論者の主観によるものであることがしばしば隠されてしまうのである。次の例を見ていただきたい。

② 自衛隊は自衛のための軍隊であるから、海外派兵はその任務を逸脱している。

③ 国連が日本に対して自衛隊の海外出動を要請しているのだから、自衛隊を海外に派遣すべきだ。

「自衛隊は自衛のための軍隊である」は定義、「国連が日本に対して自衛隊の海外出動を要請している」は状況である。どちらも、さまざまな選択可能性の中から選ばれた主観的な前提である。しかし、②と③では、その主観性の見えやすさに違いのあることに注意していただきたい。③の小前提に対しては、「国連以外の国や組織の意見はどうなのだろう」あるいは「国連の全ての国々が海外出動を望んでいるのだろうか」等の反論を簡単に見つけることができる。一方、②の「自衛隊が自衛のための軍隊である」という前提に対して反論を見つけることは難しい。「状況」における小前提も、「定義」における小前提も、ともに主観的なものである。しかし、この主観性には違いがある。「状況」の場合は客観的な外の世界から主観的に選び出すという意味の主観性であるが、「定義」は定義を主観的につくり出すという意味での主観性である。このため、「状況」の場合には、選択のもとになっている選択可能性、すなわちパラディグムが暗示的に示されているのに対し、「定義」ではパラディグムが隠されていて見えにくいのである。たとえば、次のような定義に対する反論が難しいのも、そのパラディグムが見えにくいためである。

妊娠中絶は殺人である。

自殺は個人の権利である。

……は表現の自由である。（……にはさまざまな行動が入る。）

「定義からの議論」は、その主観性の見えにくさから、「説得的定義による虚偽」として、虚偽論の対象として扱われることすらあるのである。[15]

「定義」と「状況」を比較した場合、大前提、小前提の両方において違いを認めることができる。しかし、このことから、ただちに、両者の説得力の違いまでを論ずることは難しい。説得力を論じるためには、具体的な場面と内容を個別に検討する必要があるからである。しかし、エトスにおいて両者の表現効果の違いを考えた場合、「定義」は論者の確信、あるいは説得に対する強い意欲を感じさせる形式であると言うことはできよう。自己抑制を表現する「状況」とは対照的な表現効果である。この効果が、近松において「定義」に「状況」とは対照的な意味を持たせているのである。

近松で得られた結論はどの程度の普遍性を持つのだろうか。たとえば、シェイクスピアにおいては、近松に見られたようなトポスの使い分けを認めることはできない。次の例は『マクベス』に見られる「定義」の例である。初めの「　」がマクベス婦人、次の「　」がマクベスである。[16]

「魚は食いたい、脚は濡らしたくないの猫そっくり、『やってのけるぞ』の口の下から『やっぱり、だめだ』の腰くだけ、そうして一生をだらだらとお過ごしになるおつもりね。」「お願いだ、黙っていてくれ、男にふさわしいことなら、何でもやってのけよう、それも度が過ぎれば、もう男ではない、人間ではない。」「それなら、このたくらみをお打ち明けになったときは、どんな獣にそそのかされたとおっしゃいます?」

マクベスが「男」と「人間」の定義を操作して反論している。婦人の詰問に対して、マクベスは自分の充分なエトスを確立するだけの余裕がなく、マクベスの言葉に尊大や卑下のニュアンスを読み取ることはできない。

ウィーバーは、トポスの選択から論者の思想傾向を読み取ろうとし、一章に述べた仮説を提案した。しかし、彼自身が、その仮説を使った分析に失敗していることから明らかなように、トポスから論者の思想傾向を読み取ることは難しい。しかし、トポスの表現効果に注目した場合、ウィーバーが対照的であると指摘した「定義」と「状況」の二つのトポスの間には、エトスの表現効果に違いを認めることができる。そして、この違いが近松においては規則的な分布として現れているのである。それでは、シェイクスピアにおいては、なぜこの規則性が認められないのであろうか。各トポスが、エトスにおいて異なる表現効果を持つことは、近松だけに特殊に見られる現象ではない。それは、本稿における考察が、特殊な条件下での表現効果を考えたものでないことからも明らかである。しかし、エトスにおける表現効果の違いは微細なものなのである。つまり、トポスがエトスの表現において異なる表現効果を持つことは普遍的な現象であるが、その違いが説得力のレベルにおいても有意味か、あるいは説得力のレベルにおいては意味を持たない違いであるかは、文化、そして場面によって異なるのである。近松の場合、説得に占めるエトスの比重が非常に大きいため、その違いが有意味な差となって現れるが、シェイクスピアでは近松ほどエトスの比重が大きくないため、有意味な差とはならないのである。

この結論から、我々はウィーバーの仮説に対し、次のような修正を求めることができる。各トポスによる性格の違いは客観的に観察することが可能である。しかし、それは、ウィーバーが指摘したような思想傾向の違いとしてではなく、エトスにおける表現効果の違いとして現れるものである。そして、その違いが客観的に観察されるためには、その説得がエトスを重視したものであるという条件が必要である。本稿で得られたこの結論は、トポスを思想傾向の違いと対応させようとしたウィーバーの仮説から、さほど隔たったものではない。ウィーバーにとって不幸であったのは、彼がエトスを越えて一足飛びに倫理的な価値観とトポスを結び付けてしまったこと。そして、近松のようなエトスを重視した説得が欧米の作品には少なかったことである。レトリックにおいて提唱された仮説が、欧米の説得よりも、日本の説得、しかも近松という極めて日本的な説得において有効であったことは非常に面白い現象である。これは、単にレトリックが日本の作品にお

いても有効であるということを越えて、日本という異質な文化がレトリックに対して新たな可能性を示した一つの事例であると言えよう。

注

(1) 拙稿「戦略としてロゴス・エトス・パトス」(『日本研究』第5号、一九九一年三月)

(2) トポスにかんしては香西秀信氏の次の文献に詳しい。「説得的言論の発想形式に関する研究(1)」(『琉球大学教育学部紀要』第二九集、一九八六年)
トポスにかんするその他の文献は、拙稿「レトリック関係文献目録(1)」(『筑波大学教育学系論集』第一四巻一号、一九八九年一〇月)のトポスの項目を参照されたい。

(3) アリストテレス『弁論術』一三七八b
『弁論術』は池田美恵訳(『世界古典文学全集』第一六巻、昭和四一年)をテキストとして使用した。

(4) Richard M.Weaver,*A Rhetoric and Composition Handbook* (New York,1957) p.137

(5) トポスを作文教育に応用した研究については香西前掲書。トポスを言論の分析に応用した研究については次の文献。香西秀信「議論の型と論者の思想の関係について」(『読書科学』第三一巻一号、一九八六年)

(6) Richard M.Weaver, "Language Is Sermonic",1962 (Reprinted in Richard L. Johannesen ed. *Contemporary Theories of Rhetoric : Selected Reading* (New York, 1971)

(7) Richard M.Weaver, Ibid.

(8) 香西秀信「議論の型と論者の思想の関係について」

(9) 香西秀信　同書

(10) Richard L. Johannesen et al. "Richard M.Weaver on the Nature of Rhetoric : an Interpritation", in Richard L. Johannesen et al ed. Language is Sermonic : Richard M.Weaver on the Nature of Rhetoric (Reprinted in Richard L. Johannesen ed. *Contemporary Theories of Rhetoric : Selected Reading* (New York,1971)

(11) テキストは『日本古典文学全集』(小学館、一九七五年)の「近松門左衛門集」を使用。

(12) テキストとして使用した『古典全集』(小学館)の本文では「定義」が使われていないが、『古典文学体系』(岩波書店)の本文では「定義」が使用されている。

(13) Richard M.Weaver, op.cit, *A Rhetoric and Composition Handbook*, pp.141-142

(14) Ibid. pp.137-138

(15) 説得的定義とは「退却」を「転進」と言い換えるように、言葉の情緒的意味を操作することによって、説得力を得ようとする方法を言う。また、説得的定義には、慣用とは異なる意味で言葉を使用することも含まれる。次

の例はAとBの会話である。

A　おれは女にふられたことがない。

B　しかし、この間、彼女にふられたじゃないか。

A　あれは女じゃないんだ。

Aの「女」の定義は、明らかに慣用とは異なるものであるが、それを慣用的な意味で使用しているように見せかけることにより、説得力をつくり出している。

(16) 福田恆存訳『シェイクスピア集』（一九五九年、新潮社）